
平等な重さ

葦原那岐沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平等な重さ

【Nコード】

N3929L

【作者名】

葦原那岐沙

【あらすじ】

若い少女を二人惨殺した犯人が、取調室に座っている。

ずっと黙ったままの犯人が、ついに口を開きこう
警察官に向かって質問した。

「命の重さってのは、平等なのか？」

(前書き)

この小説に興味をお持ちになった方、ありがとうございます。

このお話を読んで、少しでも何か思う事があつたら幸いです。

酷く冷たく無機質で、隅は湿気のせいで薄黒く汚れている四角い小さな部屋がある。

壁はコンクリートで固められ、唯一の窓は黒い檻のような物がついていて、まったく窓としての解放感が無かった。扉についてる小さな窓にも同じ柵がついている。扉の横の壁には、飲食店にある中が見えるショーウィンドウみたいな窓ガラスがついている。部屋の中は、それ以外にはこれと言って特徴は無く、部屋の真ん中に鉄製の作業机があり、電気スタンドが立っているだけだ。

小さな四角い部屋の外は、大きな部屋がある。

大きな部屋には、オフィスにあるような机や椅子、青黒い制服を着た人間が沢山いる。

この部屋は取調室。

机に向かい合う形で座る刑事と容疑者。座っている刑事の真横に、一人の警察官が立っている。

現在は取り調べ中。事情聴取ではなく、犯行時間と動機と目的に、殺害方法などを犯人に吐かせている。

椅子に座る容疑者はずっと喋らない。

この部屋に入ってから、ずっとだんまりを決め込んでいる。すでに
一時間は、無駄に時間が流れた。

髪の毛は乱雑に伸び放題。頬はこけて、全体的に肉はあまりなく、
目の下には黒い隈がくつきり浮かんでいる。誰もが口をそろえて、
指名手配犯の紙に載ってそうな人相だと言っだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋の中は静寂に包まれ、男達の呼吸音だけが虚しく響く。

「もう一度訊く。鬼気吊ききつり。お前さんの犯行動機と目的は何だ？ ど
うして二人を殺した？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鬼気吊と呼ばれた男性は天井をぼーっと見つめ、まったく質問の言
葉を聞いていない。

「いつまで黙っているつもりだ？ もうお前さんは捕まったんだ。
お前さんが黙秘をこのまま続けても、いずれ証言者が出る」

この言葉はせめてもの虚勢だった。

この二つの事件に、目撃者など誰ひとりいなかった。まず、発見者
すらない。発見者がいないとは、つまり鬼気吊自身が警察署に出
頭、死体を埋めた場所を証言、そして二つの死体の発見。という訳
だ。

殺人と死体遺棄の罪はほぼ確定なのだが、後は鬼気吊自身の言葉が

必要になる。

殺人に至った理由・動機。被害者との相互関係。そして何より、どうして自分から出頭したのか。

死体の埋まった場所は、どこも手が込んでおり、よほどの偶然が起きなければ数年は確実に見つからない。にも関わらず、そこまでして死体を埋めたのに出頭した理由がさっぱり掴めない。

鬼気吊の顔は、決して殺人を犯した罪の意識で自ら出頭した、という風には到底思えない無表情のままだ。

ペラペラと殺人方法と死体の埋めた場所を言ったが、それ以上の事は一言もしゃべらない。本当に呼吸をしているのか疑いたくなるような、それこそ死体のような顔だ。

いい加減痺れを切らし、座っていた中年の刑事の隣にいる若い警官が叱咤した。

「いい加減にしろ！一体いつまで黙っているんだ！！」

部屋の中に激怒の音が響き渡るが、すぐに部屋の中は静かな静寂に戻る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・刑事さんよお・・・・・・・・」

怒りの言葉のおかげなのか、蚊の鳴くような小さな声で、鬼気吊は1時間ぶりに言った。

「何だ？ ようやく話す気になったのか？」

座っている刑事が静かに問いかける。

「人間の命つてのはよお……………刑事さんはどう思う……………？」

久に放たれた鬼気吊の言葉は、刑事達が期待する言葉ではなかった。

「貴様！何を訳のわからない事……………」

「まあまあ」

刑事が、警官の言葉を遮る。

警官の方は、誰がどう見ても新米の警察官だった。己の正義感に囚われ、すぐに激情になってしまい、そのせいで失敗も数少ない。

変わって、鬼気吊の目の前に座っている中年の刑事は、誰がどう見てもベテランだ。仕事は真面目にこなし、町の住民とも円滑な人間関係を築き、警察官としての誇りやプライドも持つ。だがその一方、時にはそんな物に縛られず、警察官としてよりも人間として物事を判断する、よく出来た刑事だった。

「つまり、お前さんは人間の命を、俺がどう捉えているって事が聞きてーのか？」

「……………」

コクリと、鬼気吊は黙って頭を動かす。

そんな態度を見て、警官の方はさらにイライラした態度になる。

そんな警官をしり目に、刑事は答える。

「そうなんだあ……やはり命つてのはみーんな同価値だ。どんな聖人もどんな罪人も、命の重さつてのは変わんない。死んじまったら、同じなんだよ。全部な。生きている内は、俺にもはつきり言えんがね」

そんな答えに、警官は感銘を受けながら鬼気吊に言い放つ。

「どうだ？ これで満足だろ！」

「いいや……まだまだ……」

鬼気吊が間髪いれずに答えたので、警官は思わず黙ってしまった。

「ふむ。質問を受ければ、必ず答える。俺はちゃんと答えよう。だからお前さんの気がすんだら、今度はこちらの質問に答えてもらいたい。約束できるか？」

上手く相手の言い分を話の材料にしてしまつ。そうする事によって話がスムーズに進む。こう言う話術は、ベテランだからこそ身に付けられる。

「……分かった」

今度は鬼気吊も答え、質問を刑事に投げかける。

「刑事さんは……俺の罪は重いと思うか……?」

謎の問いかけに少し戸惑うも、刑事ははっきりと答える。

「お前さんは若い少女を二人も殺害した、しかも残酷にな。だから、お前さんの罪は決して軽くない」

「じゃあよお……もし俺が殺したのが幼く可愛い女の子じゃなくて、中年でリストラ寸前のようなサラリーマンだったらどうだ
い?」

警官はその言葉を聞き、眉をひそめる。

こいつは何を言ってるんだ? とゆう顔になった。

「……何が言いたいんだ?」

刑事の方も適当な言葉が見つからず、鬼気吊に話の要約を促す。

「だからよお……幼い女の子二人と、中年の親父二人。殺したらどっちの方が罪が重いつて聞いてんだよお……」

警官は、さらに眉をひそめる。質問の意図が、まったく理解できない。

「……法律上、前者の方が若干罪が重いだろっな」

若干とは言ったが、恐らく刑期がまったく異なるだろう。と刑事は心に思った。

「そりゃあ法律の言葉だ。刑事さんの言葉じゃねえ……俺は、刑事さんの言葉が聞きてえんだよ……」

刑事は少し間を開けて慎重に答える。

「……子供には将来がある、未成年の場合は若ければ特にだな……だから小さな子供を殺すのは……」

刑事は途中で気がついた。

額には少し脂汗が滲み、己の今言った言葉を頭の中で反芻する。

そして分かった、鬼気吊がする質問の意味が。

急に堅い表情の刑事の顔を見て、警官の方も少しづつ刑事の異変に気がつき始めた。

「だから……？ 今そう言ったな？ 刑事さんにとっては子供殺そうが、親父殺そうが、二つとも同じなんだろ？ だったらおかしくねえか…… 刑事さんよお……？ あんたの言葉は矛盾してんぜ……？」

鬼気吊の顔が、さらに無機質になった。

「子供は将来があるから殺しちゃいけないのか？ だったらいい将来が望めない親父は殺していいってのか？」

刑事と警官は、ついに確信した。

鬼気吊の問いの意図が。

鬼気吊は言う。酷く無表情で。

「命ってのは、同じじゃなかったのか？」

幼い女の子二人と、中年の男性二人。

どちらの命の重いかなど、三人とも分かりきっていた。

(後書き)

何かコメント、一言、駄目だし、など一言下さると励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3929/>

平等な重さ

2011年1月16日01時36分発行